

日本を外から見ると私が見た海外事情

【第3回 海外へ行くための準備】

今回は、準備のうち持ち物についてお話ししました。今回は、準備と称して、国事情についてお話しします。

目次

- * 前回まで(第1回～第2回)
 - (1) 海外に行くということ
 - (2) スケジュール(行程表)を決める
 - (3) チケット予約
 - (4) 海外へ行くための準備(持ち物編)
- * 今回(第3回)
 - (5) 海外へ行くための準備(国事情)
 - ① 文化・習慣・制度
 - * エピソード
 - ② 歴史
 - * エピソード

(5) 海外へ行くための準備(国事情)

「海外へ行く」ということは、日本とはいろいろな意味で異なる場所に行く、ということですね。言葉からはじまって、文化、習慣、制度、食事など。だから現地ではいろいろな体験をするし、できるのですよね。

また、「海外へ行く」ということは、「日本人として」海外の方たちと接するという事です。日本人を知らない方たちには、「日本人とはこのような人たちなのだ」と知ってもらいたいことになりますので、海外ではいつも「日本を代表してここに来ているのだ」という気持ちを忘れないでほしいと思います。いわば、「日本大使」という感じでしょうか。

これは、逆に日本に来た海外の方たちの行動を見て、私たちが感じることと同じですね。「旅の恥はかき捨て」というようなことは慎まなければなりませんね。

① 文化・習慣・制度

まず、それぞれの国にはいろいろな文化・習慣・制度があることを知っておくといいと思います。

それらが何に根付いているのかも、事前に知っているといいですね。

* エピソード

アメリカ・シカゴでのお話です。

その会社は日系のメーカーで世界各地に拠点があります。インドからマネージャー2人が来て日本人との打ち合わせになりました。廊下を一緒に歩いていると、「おや？」と日本人のマネージャーが気が付いたことがあったそうです。それは、職責上、マネージャーとして対等なインド人2人の歩く位置が、若干ずれていたのです。インド人のマネージャーの1人は、他の1人のマネージャーの半歩後ろをいつも歩いていました。

後でわかったことですが、半歩前を歩いていたマネージャーは、カースト制度上、上位にあっていたのだそうです。

インドでは、職業上の差別(区別)、カースト制度上の差別(区別)は、もうなくなっていると言われて長い年月が経っていましたが、(人々の心の部分なのでしょうか)まだ残っているところがあるのだなあ、と感じました。

* エピソード(その2)

これもシカゴでのお話です。

アメリカ系のホテルに宿泊しました。このホテルは最上階近くまで大きな吹き抜けになっているホテルで広いロビーフロアが上からも見渡せます。

金曜日のことでした。ロビーにいるスタッフの方に話を聞くと、この日はインド人の結婚式があるため、多くの人が集まるということでした。300人くらいだったようです。確

か、ゾウも登場したように思います。どこから連れてきたかは不明です。夕方から始まり、夜通し(別室の大きなホールを使用していたようですが)非常に賑やかな音楽が吹き抜けの空間に響いていました。夜中の2時頃に目が覚めてしまい、ドアを開けてロビーを見下ろすと、パーティー姿の何人がホールにいるようでした。そのパーティーは明け方まで続いたため、当日は寝不足でした。かなりのどんちゃん騒ぎだったので、翌日、ホテルのスタッフにその様子を聞いてみると、その結婚式では、アルコール類は一切提供されていなかったというのです。「アルコールは人を墮落させる」というように考えられているのだそうです。国により、いろいろな考え方があることを学びました。もっとも酔って騒ぐのはNGでしょうが。

* エピソード(その3)

アルコール関連で、インドのお話をもう一つ。インドではアルコール類の販売が規制されているところがあります。ホテルでも、ホテル内の特定の場所で、特定の時間に、パスポートの提示で購入できるようなシステムになっているところがありました。通常は、グリルシャッター(ステンレスのパイプでできた格子状のシャッター)が降りていて、ロックされています。インドでそのような州に到着して、どうしてもビール等のアルコールを飲みたいときは、次の移動先(別の州)で願いがかなうことを期待するしかありません。

* エピソード(その4)

タイ・バンコクでのお話です。バンコク市内は、渋滞がひどいので、移動手段はBTSという高架鉄道をよく利用しました。ある朝、BTSを利用しようとチケットを購入して構内に入ったところ、国歌が流れてきました。ホームに行こうと階段を上っている最中でした。すると、前に行く人たちが急に立ち止まりました。国歌が終わると何事もなかったかのように、皆動き出しました。国歌は1日2回、午前8時と午後6時に流れるということを知りました。国歌が流れている間は立ち止まって敬意を表しているとのことでした。タイ人は王様が大好きということを知っていました。これとも関連があるのでしょうかね。私は日本が大好きですが、このときばかりは「なるほど」と感心してしまいました。

* エピソード(その5)

タイ人のスタッフと待ち合わせをすることがありました。なかなか来ないので、何かあったのかと心配していましたが、30分ほど遅れて来ました。心配とは裏腹に、当人は特段何の気にも留めていないようでした。後で機会があり、彼に待ち合わせ時間のことを聞いてみました。彼の話では、タイ人は遅れることは日常であり、45分までの遅れは遅刻とは考えない、とのことでした。彼の周りの人たちだけかもしれませんが、時間に対する観念は随分と違うものだ、ということを感じました。ひょっとしたら、バンコク市内のメイン通りで起こっている毎日の大渋滞も関係しているのかもしれないね。

* エピソード(その6)

ヨーロッパ(ドイツ)での鉄道のお話です。ヨーロッパの鉄道は、原則として改札口がありません。従って、誰でも自由に入りができてしまいます。それが故に、切符を購入しないでそのまま乗車してしまう人もいます。長距離や特急ではなくローカル線の場合には、不定期に、検札の人が大抵二人一組で車両に乗り込んでくる場合があります。彼たちは胸に身分証を示すバッジをつけていることが多いです。また、鉄道のスタッフのこともあります。彼たちは、その車両の乗客全員の切符をチェックします。近距離のローカル線の場合には、車両と車両を結ぶ通路のようなものがないことが多いので、全員容易にチェックできるわけです。時折ホームを検札官二人に誘導されて一緒に歩いている人を見かけます。おそらく切符を買わずに乗車していたのでしょう。切符は必ず事前に購入することを忘れないでください。回数券式の切符もあるようです。購入した切符に日付がない場合には、乗車前に必ず日付の打刻を忘れないようにしてください。打刻忘れは、「無賃乗車」となってしまうリスクがとても高いです。打刻機は、大抵、ホームに進む入口あたりかホーム上にあります。日付に関しては、長距離列車の場合には、チケット自体に日付が記載されていますので

安心です。また、主要駅でのチケットの自動販売機でも日付入りで購入できますのであまり気にする必要はないのかもしれませんが。
従って、購入した切符に日付があるかないか、ない場合には乗車前に打刻するということは覚えておいてください。

* エピソード(その7)

これもヨーロッパ(イタリア)での鉄道のお話です
イタリア国内は鉄道で移動することが多かったです。鉄道の場合、どこから出発しているかはチェックする必要があります。イタリア国内を走っている鉄道だからといって、イタリア国内のミラノやローマ等、イタリアの主要都市が出発駅とは限りません。
その路線は、ミラノ「経由」ベネチア行きの列車でした。ベローナ(ベネチアはこの方面の列車で、終着駅となります)を経由してボローニャ方面に向かうため、ホームで列車を待っていました。なんと「2時間遅れ」のアナウンスがホームに流れました。
イタリアは、大抵列車が遅れます。「リタルド、ritardo」というホームのアナウンスがしょっちゅう聞こえてきます。
ヨーロッパは、他の国からの長距離列車が運航しています。その列車は、ドイツのミュンヘンを出発してベネチアへ向かう列車でした。その列車で指定を予約している場合には悲惨です。気を付けましょう。始発駅の確認は大切です。

* エピソード(その8)

タイに行った時のお話です。
タイ人を連れて食事に行くことがありました。タイ人は日系に勤務する社員でしたので食事代は日本人が負担します。食事が終わって会計を済ませて店を出ても、そのまま、特段「ごちそうさまでした」とか「ありがとうございました」とかの言葉はタイ人からは聞くことがありませんでした。
これは「持てる者が待てない者をサポートするのは当然である」という国民性なのだ、ということを知りました(現在は、少し変わっているかもしれませんが)。タイ人の社員も日本の会社に長くいると、少しずつ変わってくるようで、数年後には「ありがとうございました」や「ごちそうさまでした」と言うようになりました。

* エピソード(その9)

4月のヨーロッパは大きな展示会があったりするものです。この「4月」にドイツを訪問するときには注意する必要があります。それはストライキです。ドイツではこのストライキがあると、交通移動の際に大きな影響を受けます。航空会社、鉄道共に行うことがあり、本当に不便になることがあります。
飛行機でのドイツ国内移動時に、フランクフルトで、ルフトハンザのストライキに遭遇したことがありました。幸い、飛行機を利用するタイミングとずれていましたので助かりましたが、鉄道には少し苦労しました。
事前に予約(座席も指定)した長距離列車が変更となり、その車両の入れ替わりと同時に客車自体が変更となっており、予約した号車や席もありませんでした。結局、ずっと立ちどおしでの移動となり、かなり疲れたことを覚えています。
十分に時間のある場合には、いろいろな情報をいろいろなところから入手して対処できるのでしょうが、現地入りしてからは、そんなに時間的な余裕はないため、困ってしまいます。現地での毎日のニュース(内容がわからない場合には雰囲気)やホテルのフロントでの情報確認は必要ですね。

* エピソード(その10)

海外の言葉は話せたらそれなりに楽しいものです。
私は、かじった言語も入れると、英語、韓国語、ドイツ語、イタリア語、タイ語、ロシア語に接したことがあり、今でも少しずつ継続しています。ここで面白いことに気がつきました。韓国語とタイ語は同じ発音や単語があるのです。
それぞれの言語には「ウ」という発音が二つあり、特殊な「ウ」という発音は、日本語の「イ(口を横に引く)」の形をして「ウ」と発音します。この発音自体が両言語とも全く同じなのです。また、「10」を表す「シップ、sip」という単語は、同じ意味で、同じ発音なのです。私は言語学者ではないため語源についてはわかりませんが、このことを韓国人とタイ人の友人に話したら、彼たち自身も驚いていました。

②歴史

現在は過去の上に積み重ねられてできています。過去は過去、と今ばかりを見ているわけにはいきません。特に近代に起こったことなどは知っておいたほうがよいでしょう。

* エピソード

韓国・ソウルへ出張した時のお話です。

ソウル市内のホテルで韓国企業の幹部と待ち合わせをして、彼の車で移動している最中のことでした。彼が突然、「韓国経済は低迷している時期がありましたよ。あるとき、この方角に建っていたビルが山を遮っており、そのビルが原因になっているらしい、ということでそのビルを取り壊したら、急に経済が上昇してきたのです。そのビルは日本軍が建てたものでした。」と話し出しました。車内は急に重苦しい雰囲気になるやに感じられましたが、そう言った直後に「しかし、これは過去のことです。私たちは、これからは、日本にアジアのリーダーとなって皆を引っ張って行ってほしいと考えているのですよ。」という思いを話してくれました。そのあとの食事では楽しい会話に終始しました。

ポジティブな話で締めくくっていただきましたが、近代に起こったことを認識することは必要だと感じた瞬間でした。

* エピソード(その2)

これも韓国でのお話です。

私が韓国の知人たちと一緒にカラオケに行ったのは15年ほど前、2010年ごろだったと思います。当時韓国の歌手チャン・ユンジョンの「オモナ」という曲が流行っていて、私もその曲を覚えたものでした。

さて、皆でカラオケルームに入り順番に歌っていきました。定番の「オモナ」を歌い終わった後、皆からリクエストがありました。なんと、いしだあゆみ(知らない方もいらっしゃると思います)の「ブルー・ライト・ヨコハマ」でした。皆が、「韓国人は日本の歌として皆歌っている」と言うのです。驚きました。

先日、NHKクローズアップ現代で「昭和歌謡がつなぐ日韓“文化交流”新時代、テレビで日本語の曲が」という放送がありました。番組では「2004年に日本語の歌、販売解禁」「2024年に日本語の歌、テレビ放送」とありました。

日本語の歌が禁止されていたという歴史を改めて知った次第です。

* エピソード(その3)

いろいろな国で、いろいろなことが過去に起こりました。

その中で、残念ながら、現在になっても日本に対してあまり良い印象を持たない国の方たちもいます。

私が家内と韓国に旅行に行くときは、家内は絶対に着物を現地で着ることはしません。ヨーロッパやタイ・バンコクでは、よく着物を着ていました。

これは、歴史がいろいろな意味で残っていることだと思います。

韓国にも知人・友人はいますので、時折そんな話をすることもあります。

* エピソード(その4)

シカゴに出張し、現地でプレゼンをしたときのお話です。

プレゼンの終了後、アメリカ人から声をかけられました。彼は、翌月日本に行くらしく、とても楽しみにしている、ということをお話してくれました。その理由として「アメリカはほんの200年程度の歴史だが、日本は2000年以上の歴史がある。とても興味深いのだ」と言っていました。

改めて、日本の歴史の長さというものについて考えるきっかけとなりました。

* エピソード(その5)

ヨーロッパに行ったことがある方は、この「歴史」ということを体感することもあったのではないかと思います。

イタリア・ボローニャに行ったとき、近くの教会に入ってみました。宗教上の大きな絵画が教会内の小さく区切られた区画の祭壇にかかっていました。絵画の説明書きを見ると、ルネッサンス期の作品で、名だたる画家の作品でした。そこは祈りの場ではありませんでしたが、美術館と勘違いするほどでした。

そういえば、ドイツのある教会では、「ここは祈りの場で、美術館ではありません」という表示がありました。おそらく観光客の皆さんが、パシャパシャと写真を撮りまくっていたのでしょう。場の雰囲気をしながら写真を撮ることが必要ですね。

勿論、「撮影禁止」という表示のある教会もあります。

*** エピソード(その6)**

ドイツでのお話です。

ドイツ滞在中、ホテルでテレビをみていました。いろいろなチャンネルがあり、ヨーロッパの他の国の番組もみることができます。

あるとき、何気なくドイツの放送を流していた時のことでした。モノクロ映像で、先の大戦の映像が流れていました。それはナチスの行ったドキュメント映像のようなものでした。その後何度かこのような映像をみることができました。

ドイツではこの暗い歴史を教訓としてその後の発展に生かしているのではないかと感じたものでした。ただ、現在のヨーロッパ情勢をみると、他の要因があるにせよ、このドキュメントのような歴史を振り返るということが薄れてきている気がしてなりません。日本でも時折、戦時中に日本人がいろいろな地域でいろいろなことを行っていた、というドキュメントを放送しています。それらを見るたびに「こんなことをしてはならないのだ」という思いがわいてくるのと同時に、謙虚な気持ちになることを学んだりしています。毎年8月の終戦時の特集もそうですね。

私たちは、他人と過去は変えられませんが、自分と未来を変えることはできるのですよね。

では、今回はこのくらいにして、次回は、航空会社の選定についてお話しします。